

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00146

研究課題名(和文) 国際的な比較調査を踏まえた日本演劇雑誌の総合的研究

研究課題名(英文) A study of Japanese theater magazines based on international comparative research

研究代表者

児玉 竜一 (Kodama, Ryuichi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：10277783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：創刊から終刊までを押さえた演劇雑誌の点数を増やすことを目標として、演劇雑誌の書誌的な調査を進めた。あわせて、演劇雑誌の社会的・文化的な位置づけを分析・考察する作業を進めた。新聞紙上や学会でのシンポジウム等において、演劇雑誌からの知見にもとづく文化的な意義を発表する機会を多く得たことにより、演劇雑誌の資料的価値を広く訴えることができた。

演劇雑誌の細目を体系的に網羅する作業についても調査を進めた。PDF化による共有と、目次細目の入力方法を検討しつつ、計画の修正を行った。コロナウイルスの蔓延により、海外機関との連携は限定されたが、アメリカ、中国、ベルギーの諸機関との連携研究を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

演劇雑誌の研究は、文芸誌や美術誌とも関連しながら、演劇史に関わる情報を同時代に即した形で吸収するための、重要な作業の基礎となると考えられる。同時に、演劇雑誌は、映画雑誌等とも関わりつつ、世界中で出版された雑誌とも関連しあう。日本の演劇雑誌は、日本独自の特色を持ちつつも、海外の雑誌からの影響も受けている。そのような特殊性と普遍性をさぐりながら、各国の演劇雑誌と比較することにより、演劇をめぐるメディア環境や出版環境をめぐる、それぞれの特色や共通性を知ることができる。

本研究における知見を踏まえて、今後さらに、映像資料や音声資料などにまで研究範囲を拡げてゆくことができるものとする。

研究成果の概要(英文)：I conducted a bibliographical survey of theater journals with the goal of increasing the number of journals that cover the period from their first publication to their final publication. At the same time, I analyzed and discussed the social and cultural position of theatre magazines. I had many opportunities to present the cultural significance based on the findings of the theatre journals in the newspapers and at symposiums at academic conferences, and was able to appeal to the public about the value of the theatre journals as a source of information.

I also conducted a survey on the systematic coverage of the theatre journals, and revised my plan to share the journals in PDF format and to consider how to input the detailed table of contents. Due to the spread of the coronavirus, collaboration with overseas institutions was limited, but I sought collaborative research with institutions in the United States, China, and Belgium.

研究分野：歌舞伎研究、演劇研究

キーワード：歌舞伎 演劇 演劇雑誌 雑誌 演劇とメディア

1. 研究開始当初の背景

演劇にかかわる雑誌・写真（ブロマイド）・レコード・記録映像を主たる対象として本研究を開始したが、すでにレコードと記録映像については、すでに集大成的な成果にある程度のめどが立っており、本研究では、以前より継続している雑誌研究の集大成をめざすことを中心としていた。具体的には、演劇雑誌の細目の網羅化を進め、掲載写真のリスト化を図り、それによって写真資料の位置づけの精緻化も可能になると見込まれた。演劇雑誌および演劇写真については、海外雑誌からの影響関係や、海外事例との比較研究は、まったく調査研究が試みられていない状態にあった。

2. 研究の目的

演劇が上演とともに消え去る運命にあることは言い古されているが、多くの観客を擁した大劇場の演劇は、写真や劇評による記録という面において、小規模な演劇よりは、まだしも恵まれた位置にある。とはいえ、今から数十年近く前の演劇の、画像・音声・動画などが、どこにどのように残されていて、どう使えるかといった、いわば演劇のメディアリテラシーは、その取り扱いに習熟した者には知られているものの、専門領域がわずかに隣接した分野に及ぶと、まったくわからないという状況にある。本研究はその状況を、ジャンル横断的な網羅化によって打開する方途を探ろうとするものである。

研究代表者はこれまで、歌舞伎を中心として、雑誌・写真・音盤・映像といったメディアを幅広く取り上げて、ほとんど初めて研究の俎上に載せてきた。たとえば、メディアの中心を占める雑誌については、総目次と解題を数多く作成・公表してきた。これらによって、総目次を有する歌舞伎関係の演劇雑誌は倍増したわけであるが、こうした知見に基づいて、演劇雑誌研究の総合化をさらに進め、それに付随する各種メディアの状況を網羅的に把握しつつ、さらに新しい段階として、世界の演劇をとりまくメディアとの比較によって、世界的な同時性の中に位置づけを図ろうとするものである。

3. 研究の方法

如上のような目的を究明するため、まず演劇雑誌については、創刊から終刊までを押さえた書誌的研究を進めつつ、演劇雑誌の総目次化を推進することを目標とした。この作業は同時に、演劇雑誌における写真掲載の研究を進めることともなる。演劇を被写体とした写真は、日本では明治期から存在するが、撮影者が特定できない事例が多いため、写真家の作家論的アプローチからは完全に漏れている。このため、演劇写真の研究は、写真史がアプローチできない写真分野への貢献も見込まれる。

さらに本研究では、海外の演劇雑誌との比較によって、日本の演劇雑誌の独自性と世界同時性を究明することを目指している。判型や、写真頁の扱いなど、書誌および構成の面からも、そうした面を比較できると考える。

また、これまで演劇雑誌の研究を進めているが、いまなお未知の演劇雑誌が出現するという僥倖に恵まれている。演劇雑誌のみならず、映像資料、録音資料、写真資料等においても、そうした事例を待望しつつ、映像や録音についても国際的な比較はほとんど行われていないので、将来の研究に備えるべく関心を保持しておく必要を認識している。

4. 研究成果

演劇雑誌の細目を体系的に網羅する作業についても調査を進めた。PDF化による共有と、目次細目の入力についての方法を検討しつつ、計画の修正を行った。雑誌『道頓堀』や、揃いが新出の『パンフレット市村座』や、従来きちんと検証されてこなかった『演劇写真新報』の刊行状況について確認するなどした。このようにして調査を進めた演劇雑誌研究の成果については、上演資料や写真資料、映像資料等の検証とあわせて、多岐にわたる発表を行った。とりわけ、新聞や学術誌、あるいは学会のシンポジウムや学術講演会において、演劇雑誌にもとづく知見を広く訴えることにより、研究ソースとしての重要性を再認識する機会を多く得ることができた。

北京および東京で開催された、梅蘭芳初来日百周年を記念する学術講演会において、大正年間の日中演劇についての知見を演劇雑誌および映像、写真を資料として披露した。

北京および上海では、京劇の映像の流布についても調査を行い、梅蘭芳記念館および上海戯劇学院との学術交流を継続させる契機を設けた。中国の研究機関と連携する上で、中国の演劇雑誌や演劇写真の事情について触れる機会を得た。演劇雑誌については、新刊雑誌の状況などを確認し

たに留まるが、演劇研究書の刊行状況や、叢書類の出版について、梅蘭芳記念館の刊行予定などを詳しく聞くことができた。中国における出版事情は、過去四半世紀の中で、紙質等も含めて激変していることが如実にわかり、今後の刊行予定のための予算もきわめて潤沢であることを確認した。過去の写真資料等については、欧米以上に資料としての残存状況を見極めにくいようだが、演劇の映像資料に関しては、1960年代以前のものがDVDとして市販されているなど、日本や欧米以上の浸透を見ることができた。こうした映像資料が、市販されていないアーカイブとしてどのように蓄積されているかを調査するのが、次の段階となろう。

日本国内の演劇雑誌から得られた新たな知見については、大英博物館でのマンガ展に出品された「新富座妖怪引幕」に関わる、いくつかの海外での研究発表の機会に、応用することができた。雑誌および新聞からの情報を総合すると、同引幕の遍歴については、ベルギーでの展覧状況を調査する必要が生まれ、ベルギー自由大学との研究協力に発展させる予定である。「妖怪引幕」についての従来の美術史領域からの研究を越える資料は、やはり演劇雑誌に残された様々な知見によるもので、演劇雑誌（および新聞紙上の演劇記事）を詳細に調査することの重要性を改めて認識した。

また、国内の成果発表では、歌舞伎学会において、地方劇場を調査研究する上での演劇雑誌の重要性について初めて言及する機会を得た。地方劇場の研究は、日本全国に演劇という芸術形態がいかに浸透していたかを裏付けるものであるが、地方に残された資料のほか参照すべきは、やはり演劇雑誌で、ファン雑誌においては特定俳優の巡業を取り上げ、総合的雑誌においても劇場の表構えを口絵に掲載するなど、他に求めがたい情報は雑誌の中にしかない。

アメリカでは、UCLAとの学術交流を継続させ、アジア図書館と提携して、資料寄贈の仲介等を行ったほか、図書館内での展示の相談にもあずかった。芸能関係の著名個人（本田安次、小沢昭一など）に関する展示については、芸能そのものを展示することができない以上、研究歴、活動歴に添った形で、雑誌や写真資料等を展示することが中心になるであろうことを確認したが、その後のコロナウイルス感染症の蔓延によって、具体的な動きは中断している。

本研究においてまったく新しい調査先としては、ロサンゼルスの日系人博物館の調査をおこない、多くの写真資料と映像資料が所蔵されていることを確認した。戦前期からの日本人社会に関する膨大な資料を収蔵する同館であるが、そのなかに演劇（とくに歌舞伎）に関わる写真資料が数多く含まれており、とりわけ日系人収容所キャンプの中で上演されていた演劇や、複数のキャンプをまたいで稽古が許されていた日本舞踊の実態を具体的に示すものとして、きわめて貴重であることを確認した。映像資料も残されており、この中には播州地方の農村歌舞伎と共通する特色を示すものがあった。ロサンゼルス周辺の日系移民は、山陽道出身者が多いとのことで、これらの歌舞伎映像は、図らずもその事実を裏付けることとなり、移民社会における日本文化が、同時代よりも一世代前のものを温存してゆくという文化伝承の構造を明らかにするという点で、非常にこれらは、日系移民が保持しつづけた日本文化の研究につながるとともに、大戦下の収容所の中でも継続された日本文化習得について探究しうる重要な資料であり、将来の研究テーマとなるものと思われた。また、同テーマに関する重要な先行事例となる、記録映画「Hidden Legacy」の存在を知った（日本でも一度だけ学術講演で公開）が、これも幸いにして日系人博物館で映像を入手することができたのみならず、制作者が知人の友人であることも判明し、これも次の段階における有力な学術交流の材料と見込まれる。

海外雑誌の書誌的な調査は、最終年度に計画していたため、コロナウイルス感染症の蔓延によって研究計画の大幅な修正を余儀なくされたが、早稲田大学演劇博物館で整理合本を終えている250種の海外雑誌の調査を行うことができた。日本の演劇雑誌の主流であったB5版が、海外では極めて例外的であること、そして逆に、日本で例外的であったタブロイド判ないしA4版が多数を占めることを確認した。日本でも明治期にA4版が試みられようとしたが程なく休刊、大正末期にグラフィック誌が台頭するまでA4版は少数派となっている。今後は、詳細な内容の比較によって、写真版における影響などを見極めてゆく必要がある。

継続すべき研究においては、ニューヨークのリンカーン・センターのニューヨーク公立図書館（パフォーミング・アーツ館）等の調査によって、さらなる参照事例を増加させてゆく予定である。

さらに、国内における成果発表の方法としては、放送番組の活用という手段にも想到した。NHKの教養番組「にっぽんの芸能」は、古典芸能についての数少ない専門番組であるが、NHKのアーカイブを縦横に活用することができるという点では、映像資料の重要性、NHKのアーカイブの貴重さを、広く、直接、多くの視聴者に訴えることができる機会となる。歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の紹介と、その解説を依頼されたところから、NHKのアーカイブをフル活用して全十一段をすべて貴重映像で紹介するという企画を提案したところ快諾され、どの年度のどの映像をどのように選択するかという点から相談にあずかって、2020年12月11日の放送は好評を得ることができた。SNS等での視聴者の反応も、NHKのアーカイブの貴重さに触れるものが多く、また、のちに司会者（高橋英樹氏）も年間の担当番組の中で最も記憶に残る回として言及してくれた。映像の利用は、著作権その他、多くの権利が絡み合うため、発信が難しいが、こうした手段によって、映像アーカイブの重要性への認識を高めたいと考える。権利の切れた戦前の映像については、早稲田大学演劇博物館所蔵のものを、いくつかの放送番組や、監修を担当した展示（世田谷文学館「六世中村歌右衛門展」）に活用することによって、記録映像のもつ力を再認識させ、資料としての重要性を訴えることができた。

ほかに、展示という形式での成果発表は、上記の世田谷文学館「六世中村歌右衛門展」のほか、早稲田大学演劇博物館での「演劇評論家 扇田昭彦の仕事～舞台に寄り添う言葉」を挙げることができる。現代演劇から古典芸能まで幅広く見て歩いた演劇評論家・扇田昭彦の生涯を回顧する展覧会であるが、演劇評論家の展示というのがあまり前例がなく、単行本、プログラム寄稿、新聞記者としての活動と並んで、演劇雑誌への寄稿を、大きな柱として取り上げる構成を案出した。いくつかの代表的な舞台評を並べて、印象的な部分を抜き出すとともに全文を参照できるようにして、さらにその上に、単行本未収録の膨大な雑誌連載をファイル化して自由に閲覧できるようにした。演劇評論は、近年退潮ぎみの評論の世界にあって、以前から読者を得にくいジャンルとして知られるが、その魅力を掘り起こし、残された膨大な仕事を振り返るべき沃野としての、演劇雑誌の重要性を改めて提起した。また、時代性をあらわす演劇雑誌の表紙やデザインも、短命に終わるものが多い演劇雑誌の、短命であるからこそ帯びる時代の刻印の象徴として、展示にふさわしいものとして提示した。

演劇雑誌は、デザインや判型、構成、そしてもちろん内容に至るまで、多角的な検証に耐えうる複合的なテキストであることを確認できる。以上述べたような様々な角度からの研究、成果を踏まえて、写真、映像など、複合的なメディア研究に展開させてゆく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 3
2. 論文標題 近世の劇場文化の「文」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本「文」学史』第3冊（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 234-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 10月号
2. 論文標題 歌舞伎と講談 実録趣味を支えるもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「演劇界」	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 1月号
2. 論文標題 チャップリンの見た歌舞伎	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「演劇界」	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 4月号
2. 論文標題 竹本からみる歌舞伎作品	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「演劇界」	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 3月号
2. 論文標題 平成三十年間の歌舞伎	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 悲劇喜劇	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 児玉竜一	4. 巻 4月号
2. 論文標題 芸に満ちた大正の世 峠からのながめ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 演劇界	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 The Journey of the Yokai Theatre Curtain
3. 学会等名 Classical Arts × Digital Technologies (JAPAN HOUSE LONDON) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 梅蘭芳と帝国劇場、そして聚楽館
3. 学会等名 梅蘭芳初来日公演百周年記念シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 Kabuki and Technologies
3. 学会等名 国際演劇学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 歌舞伎の江戸東京 都市空間と劇場街 -
3. 学会等名 歌舞伎学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 演劇空間と新富座妖怪引幕
3. 学会等名 Mapping in Japanese Literary and Visual Culture（コロムビア大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 Keynote Lecture:The Concept of 'Theatre Tradition' in Japanese Culture
3. 学会等名 Creation, Preservation, and Transformation of Theatre Traditions: East and West（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 Adaptations in Contemporary Kabuki Theatre
3. 学会等名 Creation, Preservation, and Transformation of Theatre Traditions: East and West (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 児玉竜一・上村以和於・犬丸治
2. 発表標題 平成歌舞伎の30年
3. 学会等名 歌舞伎学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 梅蘭芳と歌舞伎女方
3. 学会等名 紀念梅蘭芳首次訪日演出百周年學術研討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 無声映画と歌舞伎研究
3. 学会等名 TALKING SILENTS (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中ゆかり・金水敏・吉川邦夫・大森洋平	4. 発行年 2018年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 135
3. 書名 時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------